

かど なが かず お  
角 永 和 夫

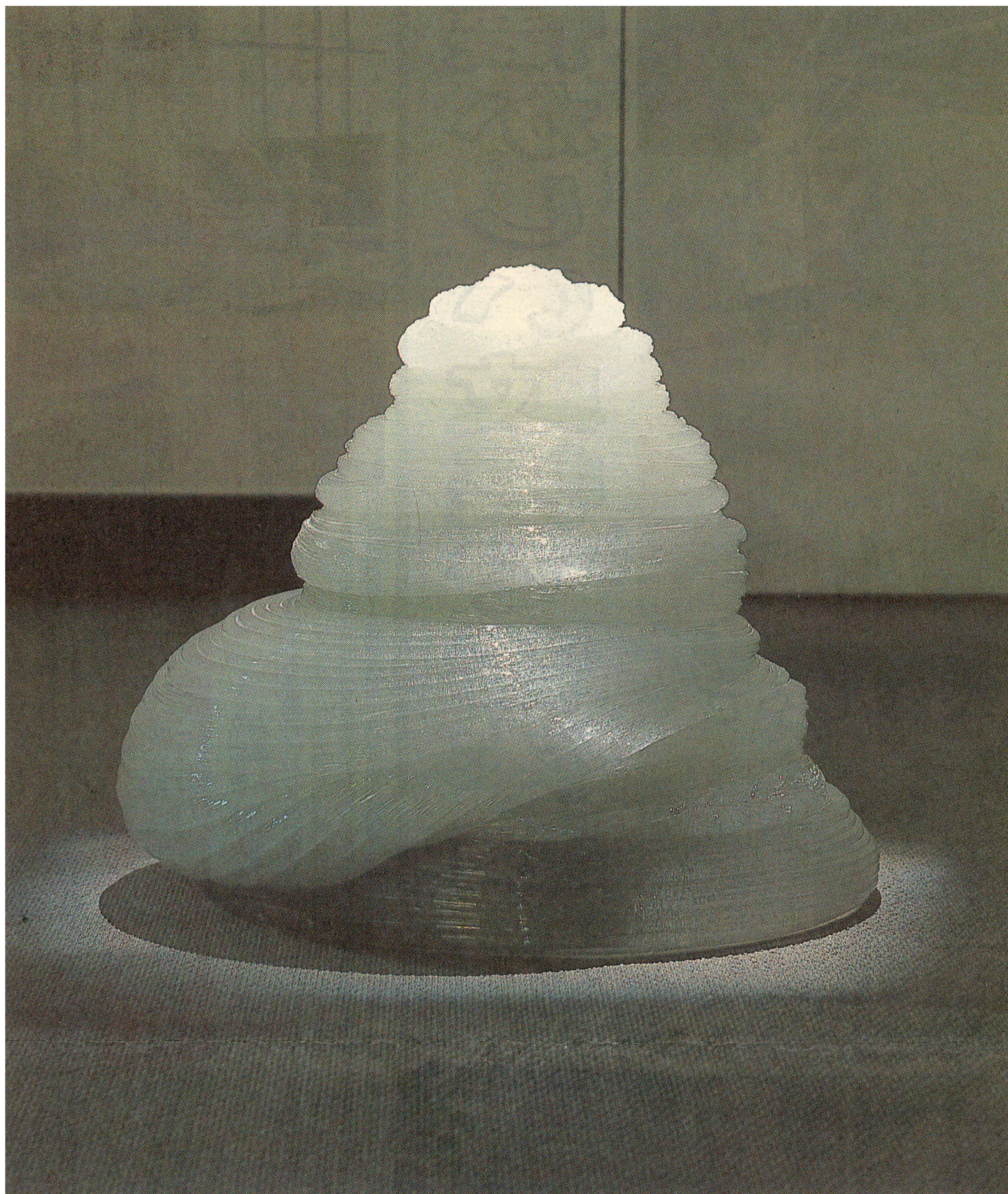
(1946年一、石川県生まれ、金沢市)

Glass No.4-G

80×78×93<sup>センチ</sup>

ガラス

1998年



天井から一筋の光が、とびつを巻いたようなガラスの塊に降り注ぐ。上部は透明感があり輝いて見えるが、底部に近づくと深い緑色を帯びる。ガラスは繊細なイメージが強いが、作品のあまりにも大きな存在感に瞬戸惑う。だが見つめると「これがガラスの本当の姿なのだ」と、今にも動きそうな塊が訴えかけてくる。

角永は工房の二階にある一四五〇度の溶解炉でガラスを溶かし、一階にある除冷炉に一筋に落としていった。除冷炉は六〇〇度から七〇〇度。少しづつ固まりながら積み重なっていく。横に垂れたり倒れそうになったりしても、落とす位置は変えない。「一点に落とし続けることで、私の作為を省き、素材の本質を引き出したのです」

一つ一つの作品に使うガラスは約一ト。全部注ぎ終わるまでに切り目を入れた。しばらくして乾燥すると、切り目の間にたぐさんの割れ目ができ、全体に幾何学模様が見えてゆく。作為を省き木そのものがつくり出す美を提示する。素材はその後、竹、和紙、繭と広がっていった。ガラスに取り組んだのは今回が初めてだ。これまで取

## 作為省いた素材の美

初めてガラスを扱うために角永は、八年の研究期間を費やした。温度と落差によってつくられるガラスの形は、柔らかな線に包まれながらも迫力が感じられる。手を加えるのが当たり前の現代。自然が生み出す美しさを見つけた。

(文化部・村上文美記者)

『Glass No.4-G』は、9月5日まで県立近代美術館で開催中の「第7回富山国際現代美術展 ポーランド・日本」で展示している。